

剛毅木訥論 : 論説

著者	由比, 質
雑誌名	龍南會雜誌
巻	129
ページ	2-8
発行年	1909-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2298/6186



論 說

論

剛毅木訥論

由 比 質

説

今茲に題して剛毅木訥論といふ以上は龍南の校風に關係しての立論たるは言ふまでもないことである。抑も剛毅木訥は我校風の中堅綱領である。我校に在りし先輩が唱道し且つ實踐して綿々後進に傳へたりし無形の「重寶」である。年々歳々人は同じからずであつても何時も龍南幾百の健兒を鼓舞したのである。又た現に刺戟しつゝあるのである。凡そ我國の學校では（外國の事は先づ別問題とする）健全なる校風の樹立は極めて必要である。校風といふ以上は其校員全体に關係するとは勿論であるが、殊に生徒が校風の中堅綱領を操持することは大に必要である。何故かすれば我國では現今教育者の地位は割合に安固でない。是れは教育者が輕薄であるとばかり斷言することは出来ぬ。教育者自身では一生献身的に同一の學校に奉職する決心であつても、國家は何時轉免を命ずるか測られぬ。又た生徒も、所謂有志者等も、一時意志の疏通を欠だとか、感情が行違つたとか云ふ事から、其人の留任を好まない場合もある（遺憾ながら）。されば生徒は此變動があつても、心を動かされない様を鞏固な中堅綱領を守ることが必要である。何處の學校でも一部分の生徒は校風の振興は全然學校長

職員の責務に屬する様に考へて居るが、之れは甚だ依頼心多き誤謬である。成程學校長職員は趨向を察し時機を視て指導督勵の任務には當るべきであるが、生徒に自覺奮勵のない所へ校風の振興すべき筈がない。况んや高等學校の如き程度の學校に於てをやである。幸にも我校には健全なる中堅綱領がある。第一高等學校の校風の綱領は何であるか。自治であるか。第二第四第六第七高等學校は如何であるか。吾輩の母校たりし第三高等學校は如何であるか。吾輩不幸か寡聞か、此等の學校に於て、我校風と相對照すべき綱領あることを聞かぬのである。此点は實に吾人の誇とする所ではあるまいか。

今や溯つて此綱領が何時から、如何にして、誰によつて我校に標榜せらるゝ様にあつたかと由來を尋ねて見たいが、文書の徵すべきものもなく、校友諸先輩の回想を促しても又た甚だ要領を得ないのである。尤も初代の校長野村彦四郎氏は剛毅の權化であるかの如き硬骨ある人格を具へられ、原來代々賢明ある校長の適切なる指導は此綱領の育成に重大の關係あること勿論であらう。櫻井前校長の如きは「剛毅の氣象と質朴の風とを以て校風として居る」と三十三年九月十二日の入學式上の訓告に明言されて居る。又た感化當時を風靡されたる會津の老儒秋月葦軒翁は「剛毅木訥近仁」といふことがあると常にいつて生徒の風尚を鼓吹されたとのことである。乍併是ればかりて此綱領が成立つたとは思はれない。試みに龍南會雜誌百二十八巻を通覽するに、往々本校に在學せし先輩の意氣込を想見することが出来る。二十五年七月五日第一回卒業生送別會の席上、藤本充安氏の答辭中に左の語がある。

(前略)吾人は他の刺激によりて興奮せるにあらず。只吾人が赤誠よりして無形の第五高等中學を建設したり。即ち本校を以て單に監督者のみの學校とは見做さざりしなり。吾人が明治廿年始めて本校に入るや、本校は一小破屋の内にありて、現今の如き宏壯美麗なる煉瓦の校舎の如きは夢にだも見ることも能はざりき。仮令學校は此の如く汚穢狹隘ありしにもせよ、吾人は確かに精神を有したりしあり。此精神は終始時に應じて出でて現今に至れり。今試に此精神の發露する所ろ、此の如き境よりして現今の域に及ぶ迄經歷せる重なる事項を擧ぐれば一學團の編成(二)體育會の創設(三)四路(五)土曜會の開設(六)略七招魂祭への寄附(八)擊劍會及柔術會の設置(九)自炊制度(十)龍南會の開會。

以上の如きは其主なるものなり。此等の事總て生徒の事業ありしや固より論を待たず。夫れ外力の感化を受くるものは外力の變化によりて悉く其影響を受くべし吾人若し監理者によりて此等の事業を完うするを得たりとせば、監理者の變化は一々影響を吾人に及ぼすべき筈なり。然るに實際之が變化を見たることあきより見れば、固より生徒一己の力なりしや知るべし。斯く爲し來たりたる原因は如何。一言以て之を云へば生徒の氣象之が融合をなせるのみ。一致は事を爲すの最良方便なり(下略)(第九號)

此活歴史は校風の原動力とも見るべきである。「剛毅木訥」に關する字句が尤も早く見らるゝのは第二號「小野紀行」中の「朴訥生」である。但し之は何等の意味もあいとも知れまい。第九號の「校粹」とあるのも何等か吾輩の注意を引くのである。原來校風なる語は屢々演説者又は雜誌記者によつて唱

へられて居るが、愈々二十七年五月第二十七號に「井上文部大臣巡回」の項中初めて「天真爛漫、剛毅木訥」の字句が見ゆるがこれが九州の青年を指し、暗に龍南の健兒を指して居る。二十九年十月第四十九號「ラフカデオ、ハーン」氏が「九州學生と居る」に朴訥 (Rugged) 剛毅の氣質あることを指示して居る、而して雜誌記者が公然校風の綱領として剛毅木訥を標榜したのは三十一年十一月第六十八號雜報欄内にある。又た三十五年以來は盛に唱道せられて居るが、要するに其由來は不明である。然るに更に退いて考へて見ると、其知らざる間に保育せられ來つたことが却て其尊き所以かも知れない。元來九州民族の士風は特に剛毅木訥ではあるまいか(九州の専有物では無いけれども)。肥薩の健兒が嘗て争ひ起つて王政復古の偉業に參したのも抑も此氣風にあらずとせんやである。例へば戊辰戦争當時佐賀藩士によつて盛に唱へられて居た俗諺に「拙者元來鍋島育ち剛毅木訥ありのま」といふのがある。我校は九州青年の重鎮であるから九州士風の權化が剛毅木訥とあつて、次第に校風の中堅綱領を造つたのであらうと推斷せらるゝのである。九州人の質朴剛毅であることは從來屢々校の内外の人によつて唱へられて居る所である。今一々例証を挙げないが「ラフカデオ、ハーン」氏は九州精神キョウシュウスピリットは日本の大勢力であると云つて居る。

吾輩は之から此綱領其物に就て少しく卑見を陳べて見たい。剛毅木訥とは頑固をいふのではない。融通の付かぬ様にある意ではない。粗大なる思想ではない。豪放なる云爲ではない。故らに破帽弊衣を得意とするの意ではない。肩を怒らし大なる杖を振り横行濶歩するの意ではない。所謂彌次の意でもない。又た創業時代の我校の状態を夢想し、昔を黄金時代として、尙古主義を執るのでも

あゝ。此等は言ふまでもなく誤られたる剛毅木訥の餘弊であつて、凡て似て非なりともいふべきである。是等は吾輩は論外として早く遠い海にでも山にでも捨てたいのである。苟も今日容儀に注意し、威儀凜然たる紳士たらんことを企圖せざるものは世界的國民でない。世界的青年であいのである。且つ又た三十七年以來の龍南會雜誌などには此網領に關し、陳腐ありとか、舊式ありとか、單純なりとかの疑惑、及び評論が頻々擧げられて、甚だしきは死せる標榜あり、別に新主義を樹てよとまで叫ばれて居る。通をきかし、粹を氣取り、眞面目を嘲つて野暮の極だと思はる連中には左様に考へられるかも知れない。龍南の健兒諸君の中には口には盛んに剛毅木訥を唱へつゝも、何となく其實踐躬行に遠慮せらるゝの氣味はないか。更に具体的に表言すれば、質素は善き事あるを知れども、安い會費で集會を催はすのは何となく「ケチ」臭いと感じ、服制が定まつて居ても、別に外オウカウ套ソウを仕立て襟に天鵝絨を付け編み上靴でも履かなければ何となく肩身狭く思ふ若殿原はあいか。集會の餘興には藝術主義イシュツシヤウ(如何はしき雜誌等に唱へらるゝ)を振り舞さゞれば意氣地があいどの感觸は起らぬか。之れ吾輩が胸襟を披いて諸君に問はんと欲する所である。之れ吾輩一片の老婆心より甚だ掛念に堪へない所である。龍南に於ては、絶て此事實がなければ、先以て幸であるが、世上一般には萬事舊主義と新思潮との兩極端が表示されて、形式上に精神上に交々暗闘して居るのである。世人の多くは其何れに適從すべきかに全く迷うて居るのである。吾輩は之が現下の風潮であると信じて居る。若し果してこんな風に守舊と粹ツイカチ的と有哉無哉で混亂しつゝ永く我國民の時代思潮を支配して居つたならば、甚だ危険至極である。若しも萬一にも龍南の健兒が一人でも此風潮に襲

はれ、醉生夢死の有様で日を送つて居たならば、龍南思想界の危機之より大なるはなしといふべきである。殊に將來に於ては大に警戒すべきである。然らば如何なる覺悟が必要であるか。

失禮ながら諸君は先づ論語第十三子路篇「剛毅木訥近仁」の項に就て、能く此金言の意味を咀嚼せんことを希望する。「剛毅木訥」の綱領とこれと必然關係して次に來るべき「近仁」の語の意味とを能く連絡して考られんことを切望する。聊かたりとも剛毅木訥を以て陳腐とするも嶄新とするも皆之れ諸君に懸れりである。由來進化論は近世學界の一大原動力である。道德上の原則も亦た進化的に活動しなければならぬ。我國人士の頭腦から全然儒教思想を排除することは到底不可能であるが、同時に又た全然儒教を今日に復活することも到底不可能である。要は儒教の神髓を採つて之を今日の進化的科學的基礎に置かなければならぬのである。元來剛毅木訥は主義でない。方法である。高、大、遠、熟なる仁道の堂にも室にも入るべき門戸である。資質である。準備である。此点に於て大聖孔子は已に進化の意を示して居る。強勁、不軟、不屈、堅忍、奮發、作興の氣象乃至令色なく巧言をく外飾なき眞面目ある心掛は仁道に近づくべき方法なりとの意である。此間古人の説を引くことは更に有力であると信ずる。

朱子——近仁之說、原聖人之意、非是教人於此體仁、乃是言如此之人於求仁爲近耳、雖有此質、正須實下求仁工夫、乃可實見近處、未能如此、即須矯揉到此地位、然後於仁爲近、可下工夫、若只守卻剛毅木訥四字、要想象思量出仁體來、則無是理也、雲峰胡氏——四者天資之近仁者也、加以學力、則不止於近矣、

新安陳氏「反觀之則柔脆華辨之遠於仁可_レ知矣

羅馬を興し精神上の原因は士民の質朴剛健の氣象である。羅馬を亡ぼしたのも亦た此氣象の進化を誤まり、遂に之を喪失した爲めである。龍南の學風は何時までも剛毅木訥であつて、健兒諸君が進化、研究、力行を怠らず、科學的培養を加へたならば、舊式でもない淺薄でもない文學や美術や音樂と相容れないこともない。遂には仁道にも淫樂ニルカウツにも天國パラダイスにも到達することが企てられぬでもないのである。吾輩は健兒諸君の理想が何處までも高、遠、大であることを望むと同時に、其の理想は堅實に諸君の現實と、調和する様に何事も飽まで研究的態度を執られんことを切望する。若しも諸君が日夕相唱して「その剛健の質なりて、玲瓏てらす人の道」とか「思は馳する朴訥の、流風薫る銀杏城」とか謠ふ時にても、剛毅は龍田山の神の宣託カレトクで、朴訥は清正公様の靈符であるといふ様な無我夢中の心持で居られたらば、校風の振興も百年江河の清を待つのと同様であらうと考へるのである。

更科日記地理考 (承前)

本田 江 楠

横走關

御殿場近傍説御殿場は今とは御厨町と改む十里木説十里木は須山の西、富士との二つあり。十里木説は詞林采

葉に載する所にして、同抄駿河國の條に「彼國には富士足鷹の二山あり中略此兩山の間昔は東海道の驛路なり其あはひに横走關といふありけり云々。其不二と足高との間と云ふ處今の十里木にて此所よ